

あいちトリエンナーレ 2019 舞台芸術公募プログラム

N y m p h é A r t # 1 5
ニンフェアール第15回公演

メキシコ・日本：響きの情熱

Pasión por el timbre de México y Japón

愛知県芸術劇場小ホール

2019.9.23（月・祝）18:30 開演

主催：ニンフェアール

共催：あいちトリエンナーレ実行委員会

協力：株式会社 大塚製作所

名古屋大学国際機構 国際教育交流センター アドバイジング部門



情の時代
あいち
トリエンナーレ
2019
舞台芸術公募プログラム

==ご挨拶==

本日はお忙しい中、ニンフェアール第15回公演にご来場頂き有り難うございます。2005年の第1回公演から毎年続けてこられましたのも、ご来場下さる皆様、ホール関係者、公演に関わって下さる方々の暖かいご支援の賜物であり、心からお礼申し上げます。

本公演では、昨年の国際交流基金による助成で実現した佐藤紀雄（ギター）、木村麻耶（二十五絃箏）、伊藤美由紀（作曲）によるメキシコ公演ツアーと同じメンバーで、メキシコ、日本の現代音楽を紹介します。メキシコで始めて二十五絃箏を紹介し、ギター、二十五絃箏とメキシコのオニックス・アンサンブルとともにユニークな楽器編成によるメキシコ人、日本人の作曲家の現代作品をメキシコ市、モレリア市の6カ所で紹介し好評を博しました。又、第14回佐治敬三賞を頂いたのは、同演奏家とともに開催したニンフェアール第10回公演『東洋と西洋の絃』で、ニンフェアールにとっても大切な演奏家であり、記念すべき第15回公演を同演奏家とともにあいちトリエンナーレ舞台芸術公募プログラムに参加することができ光栄です。

今回のプログラムでは、メキシコ、日本でも度々演奏され、佐藤、木村のレパートリーともなっているエベルト・バスケス、伊藤美由紀の二重奏作品を含め、ギター、箏による各々のソロ作品、そして、昨年のニンフェアール第14回公演でも関わって頂いた名古屋フィルハーモニー交響楽団首席打楽器奏者の窪田健志にも加わって頂き、ギター、二十五絃箏、打楽器による伊藤の新作などを含んだ盛りだくさんな内容でお届けします。また、伊藤の新作では、本公演のために大塚製作所により制作していただいた微分音を音階に含んだ『凜』も使用致します。メキシコ、日本の個性的で魅力的な音響をお楽しみ下さい。

追記：「二十五絃箏の可能性」をテーマにリサーチをすすめる矢先、今月、お亡くなりになられた二十五絃箏の開発者でもあり箏の現代音楽への発展に貢献された野坂恵子氏にお悔やみ申し上げます。野坂氏の教えを受けた木村麻耶さんと関わり二十五絃箏の為の作品を5曲も書く機会を得られて感謝しております。

2019年9月23日

ニンフェアール・伊藤美由紀

ニンフェアール

2005年愛知県で開催された国際芸術フェスティバル参加を機に結成。ニンフェとは、フランス語の睡蓮の意味で、ギリシャ語の乙女、蛹を意味するニンフとをかけており、アールは、フランス語でアートを意味する。美しく新鮮で、将来への可能性を秘めた芸術作品を名古屋で紹介する。ヴィオラ・ダモーレとリコーダーによるニンフェアール第1回公演『古楽器の現在』から始まり、愛知県にゆかりのある作曲家、演奏家を招聘し、テクノロジーの使用、映像作家とのコラボレーション、ユニークな楽器編成など、毎回、個性的なアイデアで企画。2014年第10回公演『東洋と西洋の絃』にて、チャレンジ精神に満ちた企画で且つ公演成果の水準の高い優れた公演に送られる、第14回佐治敬三賞を受賞。

==プログラムノート==

= Program =

1. マヌエル・ポンセ 《エストレリータ》(1912) ギターとマリンバ版

Manual Ponce: *Estrellita* (1912)

2. マリオ・ラビスタ 《Natarayah》(1999) ギターの為の

Mario Lavista: *Natarayah* (1999) for guitar

3. 伊藤美由紀 《絃の独白》(2014) ギターと二十五絃箏の為の

Miyuki Ito: *Strings' Soliloquies* (2014) for guitar and 25-string koto

4. 加藤昌則 《フロフレイマ》(2016) ヴィブラフォンの為の

Masanori Kato: *FloFlaima* (2016) for vibraphone

5. エベルト・バスケス 《イクノクイカトル》(2014) ソプラノとギターの為の

Hebert Vázquez: *Icnocuicatl* (2014) for soprano and guitar

休憩

6. エベルト・バスケス 《浮世絵～庄野の驟雨》(2013) ギターと二十五絃箏の為の

Hebert Vázquez: *Una lluvia repentina* (2013) for guitar and 25-string koto

7. 武満徹 《すべては薄明のなかで》から I, IV 楽章 (1987) ギターの為の

Toru Takemitsu: (I) and (IV) from *All in Twilight* (1987) for guitar

8. 高橋悠治 《有明》(2009) 二十五絃箏の為の

Yuji Takahashi: *Ariake* (2009) for 25-string koto

9. 伊藤美由紀 《鳥の創造》(2019) ギター、二十五絃箏、打楽器の為の (世界初演)

Miyuki Ito : *Creatión de las aves* (2019) for guitar, 25-string koto and percussion (WP)

佐藤紀雄(ギター)
木村麻耶(二十五絃箏、歌)
窪田健志(打楽器)

= 1部 =

1. マヌエル・ポンセ 《エストレリータ》(1912) ギターとマリンバ版

ポンセはパリでデュカスに師事し、フランス近代音楽と自国メキシコの伝統音楽を融合させた美しい作品を多く残し、メキシコを代表する作曲家となる。この曲は歌曲として作られたが、その美しいメロディーは、ヴァイオリンやギターその他多くの楽器に編曲されて演奏されてきた。本日はギターとマリンバによる二重奏によって演奏される。

(佐藤紀雄)

マヌエル・ポンセ(1882-1948) カルロス・チェベス前の時代の重要なメキシコ人作曲家。ギター奏者のアンドレ・セゴビアと親交があり、ギター奏者の間で有名なギター作品が多数ある。

2. マリオ・ラビスタ 《Natarayah》(1999) ギターの為の

冒頭、弱音のギターのオステイナートが、遠くでドラムが鳴っているように展開していき、フォルテで豊かな和声付けをされた旋律に遮られる。全曲通して、これらの2つの要素が交互に展開する。タイトルのサンスクリット語の *Natarayah* は、ヒンズー教神話に出てくる宇宙の踊り手の名前からとられた。

(デビッド・スタロビン / 伊藤美由紀・邦訳)

マリオ・ラビスタ(1943~) メキシコを代表する作曲家の一人。カルロス・チェベスの弟子で、パリに留学し、即興グループで活動、電子音楽スタジオで制作の経験もある。弟子には、ハビエル・アルバレス、アナ・ララ、ガブリエラ・オルテイス、エベルト・バスケスらのラテン・アメリカの音楽要素を取り入れつつ、情熱的かつ個性的な作風で国際的に活動を行う作曲家が続く。

3. 伊藤美由紀 《絃の独白》(2014) ギターと二十五絃箏の為の

この作品では、ギターの最低音であるE音を基音とした16倍音をもとに、コンピュータで音にひずみをかけて計算し、圧縮、拡張し新構築された倍音構成の5パターンのヴァリエーションからのピッチ素材を作品に使用している。複雑な音色を創造するために、コンピュータでの計算を1/4音(半音より狭い微分音まで)と設定しているために、箏とギターの最初のチューニングに1/4音を取り込んでいる。分析結果の構成音の全てを縦の響きとして利用することは、今回の編成では不可能であるため、横の時間軸に再構成している。箏とギターの打楽器的なノイズ音と混ぜ合わせて音を濁らせることでピッチを揺らし微分音的な効果を試みている。絃楽器特有のひずんだ音色、透明感のあるハーモニクスなどで絃の独白を表現している。

この作品は、佐藤紀雄さん、木村麻耶さんの為にニンフェール第10回公演のために作曲し、その後、お二人の企画する「紡ぐ糸」公演、メキシコ公演で何度も再演していただいている。毎回、お二人の演奏からアイデアを頂き作曲の原動力となっている。お二人に心より感謝の意を表します。

(伊藤美由紀)

*プロフィール(出演者プロフィール参照)

4. 加藤昌則 《フロフレイマ》(2016) ヴィブラフォンの為の

今回の制作に関して、大きく二つの事を発想の根幹においた。一つは「ファンを使って持続音にヴィブラートをかけるヴィブラフォンの特性をどう使うか」もう一つは「再現のない音

楽を今回も構築すること」であった。再現のない音楽とは、僕はメロディーなり調性なり、古典的な様式をかなり意識して長いこと作品を作ってきたから曲の中で音楽の再現は不可避で、作品の中で重要な意味を持っていたけれど、実際の時間は常に移ろい、過去に戻ることができないのと同じように、音楽もそうした不可逆的な感覚で捉えてみる、最近取り組んでいる自分にとっては新しい書き方である。ヴィブラフォンらしからぬ音の細かい、速いパッセージから始まる時間は、やがて間延びし、次第に瞑想的なこの楽器独自の音の流れに変わる。メロディーのような、単なる断片のような、漂い消えてしまう短期的な記憶が、不思議な音楽体感をもたらすのではないかと思う。

(加藤昌則)

加藤昌則 東京藝術大学音楽学部作曲科を首席で卒業。同大学大学院修了。作曲活動の他、在学中より自作自演による活動を始め、2003年にはワインの楽友協会ホールに全自作自演によるリサイタル。近年はレクチャーなどの講演も全国展開し、演奏会のプロデュース、2011年、14-15年のNHK全国学校音楽コンクールの課題曲制作など、活動は多岐に渡っている。2016年4月よりNHK-FM「鍵盤のつばさ」パーソナリティ。

5. エベルト・バスケス《イクノクイカトル》(2014) ソプラノとギターの為の

この作品は、2014年6月に34歳で癌で亡くなった妹の*Citlali*の想い出として書かれた作品である。タイトルの*Icnocuicatl*（イクノクイカトル）とは、スペイン人による征服以前の時代にナワトル語（メキシコ先住民ナワ族の用いる言語）によって死についての概念や、苦痛、悲しみを表現した詩の形式である。一般的に生と死、快樂と苦痛、歡喜と悲しみのような対照的な要素を扱う。メキシコ人歴史学者アンヘル・マリア・ガリベイ（1892-1967）によってスペイン語訳に編集されたナワトル語の詩集からソプラノとギターの為の以下の3つの歌をテキストとして選んだ。（1）理解すること（2）亡靈の居場所（3）歌の法則

（エベルト・バスケス / 伊藤美由紀・邦訳）

エベルト・バスケス(1963-) 1963年生まれ。メキシコ市国立音楽大学でギターをマルコ・アントニオ・アンギアーノに、作曲をマリオ・ラビスタに師事する。カーネギー・メロン大学（アメリカ）では、レオナルド・バラダ、ルーカス・フォスに作曲を、レザ・ヴァリに電子音楽を師事し、修士修了。ブリティッシュ・コロンビア大学（カナダ）で作曲学部博士課程修了。メキシコ内外で、数々の受賞、奨学金を取得。2000年以来、モレリア市（メキシコ）の大学の教授。

= 2部 =

6. エベルト・バスケス《浮世絵～庄野の驟雨》(2013) ギターと二十五絃箏の為の

箏とギターの為のこの作品は、日本の浮世絵木版画に基づいた現在続行中の室内楽作品シリーズに含まれている。タイトルは、歌川広重の『東海道五十三次』の版画シリーズの有名な作品からつけられており、京都と江戸をつなぐ東海道にある45番目の宿場である庄野宿での突然、雨に降られた旅人一行を描いた作品である。私の音楽は、土砂降りから雨宿りの場所を探そうとしている人々の不安さのような、落ち着かない状況を描こうと試みている。この作品は、佐藤紀雄氏と木村麻耶氏に捧げられている。（エベルト・バスケス / 伊藤美由紀・邦訳）

7. 武満徹《すべては薄明のなかで》から I, IV 楽章 (1987) ギターの為の

武満徹がポール・クレーの同名の絵画作品 *All in Twilight* に触発されて作曲したこの曲はイギリスのギターの名匠ジュリアン・ブリームのために作曲され、彼に捧げられている。

1988年に彼によってニューヨークで初演された。全4曲のなかから本日は1と4楽章を演奏する。薄明の乳白色のなかで浮遊する儂い時間を掬い取るような音楽。

（佐藤紀雄）

武満徹(1930-1996) ストラヴィンスキーに認められ、ニューヨーク・フィルハーモニックからの委嘱で尺八、薩摩琵琶とオーケストラという当時、斬新な編成とアイデアで作曲された『ノヴェンバー・ステップス』(1967)により国際的地位を築いた。ギターをこよなく愛し、ソロ、アンサンブル、オーケストラから編曲までギターを使用した作品がたくさんあり、ギタ一奏者のレパートリーになっている。

8. 高橋悠治《有明》(2009) 二十五絃箏の為の

野坂さん（野坂恵子）のお勧めもあり、峰崎勾当の「残月」を参照して書いた。有明は残月とおなじ、明け方に空に残る月のこと、この曲も「残月」とおなじ追悼の曲、2007年に亡くなった高田和子のために。

（高橋悠治）

*残月：地歌・箏曲。1781～1801の頃大坂の峰崎勾当（みねざきこうとう）が作曲。門人の娘の死を悼んで作ったもの。

高橋悠治(1938-) 作曲家としてのみならずピアニストとしても精力的に個性的な活動を続けている。20代の頃、ドイツ留学中にクセナキスに師事したことから、クセナキスの著書「音楽と建築」も翻訳している。

9. 伊藤美由紀《鳥の創造》(2019) ギター、二十五絃箏、打楽器の為の（世界初演）

今回、メキシコをテーマとした作品を書こうとメキシコのアートをリサーチしていたところ、以前、展覧会で見て気になっていたレメディオス・バロの『鳥の創造』を思い出した。彼女はスペイン人シュルレアリスト画家であるが、晩年はメキシコに移住し制作活動を行う。以前、自分の作品のテーマとして取り上げたメキシコ人詩人のオクタビオ・パスに彼女に関する詩があることも気になっていた。彼の詩は、「彼女が描くのは時ではなく、時が憩う瞬間である。」と語る。彼女の作品は、神秘的な雰囲気に包まれて音楽的な時間が感じられる。『鳥の創造』では、三角形のプリズム、3弦のヴァイオリン、3原色の絵筆、3羽の小鳥など、3という数字がテーマになっている。ギター、二十五絃箏、打楽器の3つの楽器で、各々の微分音を含んだ音色を意識的に混ぜ合わせ神秘的な音響を創造した。

この作品の為に制作して頂いた微分音ベル「凜」でお世話になった大塚製作所の根岸忠宏さんに感謝致します。

（伊藤美由紀）

==出演者プロフィール==

●佐藤 紀雄(ギター) : 1951年生まれ。1971年(現)東京国際ギターコンクール優勝。以後、ギター演奏と指揮活動を広範囲に行ってきた。ギター演奏においてはクラシックレパートリーの他、武満徹、高橋悠治、近藤謙、松平頼暁、福士則夫、その他多くの作品の初演、また指揮者としても内外の新しい作品の初演を含め数多く演奏している。海外からの招聘も多く、これまでにパリ、ニューヨーク、ハンブルク、ロンドン、メルボルン、北京、メキシコ、デンマーク、フィンランド、エストニア、ブルッセル、アントワープ、ハバナ、イタリアなどリサイタルや各地のアンサンブルと共に演奏してきた。1997年にアンサンブル・ノマドを結成し音楽監督として毎年定期演奏会を開いてきた。またアンサンブル・ノマドでも海外から多く招かれ、ハッダースフィールド音楽祭、ガウデアムス音楽週間、モレリア音楽祭など主要な音楽祭で演奏してきた。1990年、京都音楽賞(実践部門賞)。1994年、中島健蔵賞。1996年、朝日現代音楽賞。2002年、アンサンブル・ノマドとして第二回佐治

敬三賞を受賞。ギター・ソロのCD、アンサンブル・ノマドのCDなど多数リリースしている。桐朋芸術短期大学、青山学院短期大学、また日大芸術学部各ギター科で後進の指導にあたっている。

●木村 麻耶(二十五絃箏、歌)：北海道出身。三歳より、箏・三絃・二十絃箏を橋本はるみ氏に師事。第28回全道三曲コンクール第1位、北海道新聞社賞受賞をはじめ幼少より数々のコンクールで優勝、入賞する。第15回日独青少年コンサートに選ばれ、ドイツにて10日間に渡り、各地演奏する。ビエン・ナーレ(ロシア)出演。第35回釧路新人演奏会に出演、奨励教育長賞を受賞。セルバンデス文化センターにてギター・箏・尺ハリサイタルを開催。財団法人地域創造邦楽地域活性化事業に参加し、熊本県の各地を回りアウトーチやコンサートを行う。第17回賢順記念くるめ全国箏曲祭にて最高賞(賢順賞)受賞。現代音楽フェスティバルMaerzMusikより招請され、ベルリンにて演奏する。母校・中学校にてアウトーチを行う。釧路音楽協会より記念表彰。平成24年度別海町文化奨励賞受賞。同年、地元別海町にて木村麻耶リサイタル開催。その他海外公演も多数。在学中に箏、十七絃箏、二十五絃箏を野坂恵子氏、滝田美智子氏に師事。現在、釧路音楽協会賛助会員。宮城会員。生田流宮城社教師。4plusメンバー。

●窪田 健志(打楽器)：1983年大阪生まれ。長野県上田高校を経て、東京藝術大学卒業後、同大学院修士課程修了。2002年東京佼成ウインドオーケストラ アジア公演を皮切りに、在学中より様々なオーケストラメンバーとしてシンガポール、チェコ、ドイツなどで演奏。日本管打楽器コンクール第2位。PMF、宮崎国際音楽祭、小澤征爾音楽塾オペラ公演などに参加。芸大フィルハーモニアと打楽器コンチェルトを協演。歌手 谷村新司と奈良、東大寺での演奏や、フジテレビ系列「のだめカンタービレ」出演、演技指導、CD録音など、活動は多岐に渡る。2010年(公財)名古屋フィルハーモニー交響楽団ティンパニ・打楽器奏者に就任。現在、首席奏者。演奏活動としては、オーケストラを中心に、室内楽、また打楽器ソロ・リサイタルを各地で公演を行う他、音楽之友社「バンドジャーナル」ワンポイントレッスン連載や、各コンクールの審査員なども務める。名古屋市民芸術祭ベスト・アーティスト賞、第23回青山音楽賞等を受賞。「くぼった打楽器四重奏団」「パークッシュン・ギャラリー」「パークッシュ・フォース」各メンバー。菊里高校音楽科、名古屋音楽大学の非常勤講師。趣味はタップダンス。

●伊藤 美由紀(作曲)：愛知県立芸術大学、マンハッタン音楽院修士課程修了後、コロンビア大学(ニューヨーク)で作曲をトリスタン・ミュライユに師事、博士号を取得。文化庁芸術家在外研修員としてIRCAM(フランス国立音響音樂研究所)にて研鑽を積む。ミュージック・フロム・ジャパン(ニューヨーク)、アタック・シアター(ピッツバーグ)、愛知芸術文化センター、Sinus Ton(ドイツ)、大矢素子、加藤訓子、等からの作品委嘱ほか、名古屋文化振興賞、日本交響団振興財団作曲賞入選、フランコ・エヴァンゲリスト国際コンクール(イタリア)優勝などを含み、カーネギーホール(NY)、レゾナンス・フェスティヴァル(パリ)、ISCM(香港、エストニア)、ICMC(マイアミ)、SMC(ギリシャ、スペイン)、Re:New(デンマーク)、Visiones Sonoras(メキシコ)、Foro国際現代音楽祭(メキシコ)、Sinus Ton(ドイツ)、アジア音楽祭など国内外で作品の発表を続けている。また、ニンフェール、JUMP(日米:新しい音楽の展望)の代表として自主企画公演を定期的に展開。ニンフェール第10回公演は、第14回佐治敬三賞受賞。『時の砂』がALCD80からリリース。執筆活動として『音楽現代』に特集記事や公演批評を寄稿。メキシコのコンピュータ音楽雑誌『Ideas Sonicas』に自作品の分析論文(英語)が掲載。『二十五絃箏の可能性』の研究テーマが、2019年カワイサウンド技術音楽振興財団研究助成を受賞。今まで、名古屋芸術大学、千葉商科大学、愛知県立芸術大学大学院、愛知県立大学、四川音乐学院(中国)などで、後進の指導にあたっている。http://www.miayuki-ito.com/Miyuki_Ito/Home.html

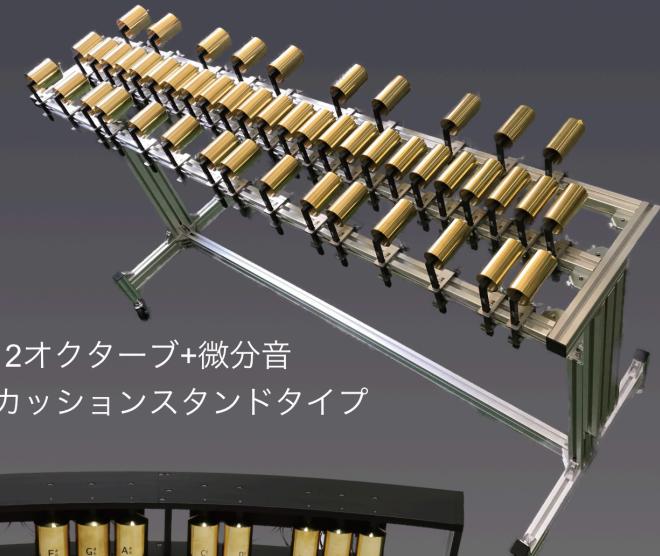
凛 RIN

**Bell Percussion
Otsuka Factory**

傾斜スタンドタイプ



2オクターブ+微分音
パークッシュンスタンドタイプ



自動演奏+MIDIキーボード制御タイプ



OTSUKA Factory Co.,Ltd
株式会社 大塚製作所
<http://bellrin.jp/>

